

発展期教諭等研修の省察・対話・探究に関する考察

－令和6年度の試行実施から－

学校支援部 研究開発・グローバル教育担当

1 研修の目的とねらい

採用20年目である発展期の教員は、校内のミドルリーダー的な立場として組織の運営に携わり始めている、もしくはすでに役割を担っており、教員育成指標では全校的視野に立った実践的指導力を発揮し、自身の役割を果たすことが求められている。研修の方向性として、NITS戦略（2022）に示された教師の主体性を尊重し、「現場の経験」を重視した学び、そして教師自身の「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現することを目指した。そこで、研修の目的を「子供たちの『生きる力』を育成するとともに学校経営等の総括的・指導的な役割を果たすために、これまでの教育実践を省察し、時代の変化にも対応できるよう『新たな教師の学びの姿』を体現しながら、探究心をもって自ら学び、資質・能力の向上を図る」とし、「省察する力（自己を振り返り、社会を見通し、実践する。）」「対話する力（他者と協働し、自己の価値観を広げ深める。）」「探究する力（自ら問いを立て実践を積み重ね、次につなぐ。）」という三つの具体的な力をねらいとして設定した。

2 研修の構成

教育センターが主導する共通研修と、各教員が設定した教育実践課題に所属校で取り組んだり、様々な研修等を受講したりする自主研修を組み合わせ、一年間を通したプログラムとした。共通研修は合計4回とし、1回目は各自で受講するオンデマンド研修、2回目以降は講義とグループ対話を組み合わせ構成した（表1）。講義については、教員が学び続けること、探究的に自身の学びを捉え考えることを意図した。また、組織における自身の立場や役割を意識した実践となるように、学校組織マネジメントも組み入れた。対話は、これらの講義を受けて実践を振り返って語り合い、互いから学ぶ合うことを意図して、異校種、異職種による4人構成のグループをホームグループとした。共通研修Ⅲは各教員の教育実践課題の実践の促進を図り、他の回よりも対話の時間を長く設定し、ホームグループのメンバーとは違う構成によるクロスグループでの対話も取り入れた。また、グループ対話にファシリテーターを付け、共通研修ⅡはNITSに関わる方々に依頼し、共通研修ⅢとⅣは教育センター指導主事が担当した。受講対象者は小学校教諭5名、中学校教諭3名、高等学校教諭14名、特別支援学校教諭3名、養護教諭3名（小学校2、中学校1）、栄養教諭1名（小学校1）である。

表1 発展期教諭等研修 共通研修の構成

共通研修Ⅰ（オンデマンド） 4月初旬～5月中旬	①研修の意義・概要等 ②教育の動向、高知県の求める教員像 ③新たな教師の学びの姿の実現
共通研修Ⅱ（集合・対面） 5月28日	講義1「学び続ける教師～キャリアの振り返り～」→対話（ホーム） 講義2「学び続ける教師～新たな教師の学びの姿～」→対話（ホーム） 振り返り
共通研修Ⅲ（集合・対面） 8月19日	対話 講義1「探究的な学び」→対話（ホーム） 講義2「学校組織マネジメント」→対話（クロス） 振り返り→対話（ホーム）
共通研修Ⅳ（集合・オンライン） 2月13日	講義1「1年間の取組をとらえて」→対話（ホーム） 講義2「今後に向けて」→対話（ホーム） 振り返り→対話（ホーム、2回）

3 高めたい力の「省察する力」「対話する力」「探究する力」

受講者は年度当初にこれまで積み重ねてきたキャリアを振り返り、研修中も適宜振り返る。その振

り返りをもとにして共通研修で他者との対話に臨み、自身と他者との状況や考えなどの違いから生まれる発見や気づきをもつ。場合によっては再度振り返り、そして更に問いをもち他者と協働しながら実践を重ねて、今後につなげる。研修を受講する一年間だけにとどまらず、その先の実践につながるよう、省察、対話、探究により周囲と協働し、学びつつ教育活動を進めることを期待した。

本稿では、発展期教諭等研修において高めたい力として設定した「省察する力」「対話する力」「探究する力」について、受講者に実施した2種類のアンケート調査の四件法による選択式の回答と記述式の回答内容から考察する。一つ目のアンケート調査は4回の共通研修終了ごとに実施したもので、共通研修Ⅰはオンデマンド研修であったため、受講者が集合する共通研修Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの回答を検証する。二つ目は共通研修Ⅳ終了後にとった一年間の研修全体に関するアンケート調査である。

4 結果

(1) 共通研修Ⅱ、Ⅲ、Ⅳのアンケート調査

選択式の設問に対する回答結果を表2に示す。選択肢を選んだ理由の記述内容は、ユーザーローカルAIテキストマイニングツール（<https://textmining.userlocal.jp/>）により分析した。

設問1、共通研修Ⅱ、Ⅲ、Ⅳを受講者が有意義と感じたかどうかについては、全員が肯定的回答であった。その理由の分析結果を名詞と動詞に着目し、大きさ順に述べる。Ⅱでは、名詞は「対話」、次に「ファシリテーター」、動詞は「振り返る」、次に「つながる」「きける（聞くことができる）」であった。Ⅲでは、名詞は「マネジメント」、次に「学校経営」「学び」「探究」が同じ大きさに並び、動詞は「振り返る」「立ち止まる」「取り組む」「せまる」が同じ大きさであった。Ⅳでは、名詞は「対話」、次に「省察」、次に「実践」、動詞は「振り返る」「語り合える」が同じ大きさであった。

設問2、教育実践を省察したことが今後の教育実践に役立つと思うかどうかについては、Ⅱにおいては、1名が「あまりあてはまらない」と回答し、それ以外は肯定的回答であった。Ⅲにおいては、全員が肯定的回答であった。この設問に関しては、「これまでの教育実践」がどの期間を指すのかが明瞭ではなかった。そのため、Ⅱは受講者が集合する1回目であり、年度当初でもあったため多くが19年間と捉えて回答していたが、ⅢではⅡ（5月28日）以降と捉えた受講者と19年間と捉えた受講者がいた。記述については、当然ながらⅡでもⅢでも、「省察」や「振り返る」という言葉が大きく現れていた。しかし「役立てる」「結び付ける」や「展望」のように、省察から次の段階に意識が向かっていることを表す言葉があった。

設問3、4、5、6はグループ対話に関する設問であり、選択式の問いのみとした。「あまりあてはまらない」という回答もあったが、概ね肯定的回答であった。

設問7は、受講者が19年間の振り返りと今年度の自身の実践等を記録する様式に関するものである。この研修用に設置したGoogle Classroomに様式を置き、受講者同士でも見合うことができるようにした。様式を使用するかどうかは受講者に任せた。否定的に回答した受講者は若干おり、そのうちの1名は「必要性を感じなかった」という回答で、様式を使用しなくても研修を進めることに困難を感じていなかった。理由の記述には、「振り返りやすい、振り返る」「まとめやすい」「（これから取り組むための構想を）立てやすい」などの言葉が大きく現れた。多くの受講者が記録することの重要性、有効さを感じており、記録をすることにより省察することができる、見通しをもつことができる、思考を言語化することができる、対話に生かすことができるという記述があった。

表2 選択式の回答結果（四件法の平均値）

設問	共通研修（回答数）		
	Ⅱ（29）	Ⅲ（28）	Ⅳ（26）
1 本日の研修は有意義だったか。	3.83	3.79	3.85

2	これまでの教育実践を省察したことは、今後の教育実践に役立つと思うか。	3.69	3.74	(質問なし)
3	講義の内容をグループ対話に役立てることができたか。	3.55	3.71	3.77
4	自分の考えを他者に伝えることができたか。	3.76	3.71	3.73
5	対話により、自分の考えを深めることができたか。	3.72	3.75	3.92
6	ファシリテーターがいることで、対話に広がりや深まりがあったか。	3.72	3.71	3.88
7	様式は取組を進めることに役立ったか。	3.59	3.54	3.46

(2) 1年間の研修に関するアンケート調査

①「自主研修の課題の設定や取組を進めるに当たり相談した人がいるか」、②「研修の構成（共通研修と自主研修の組合せ）は、主体的に取り組むことにつながったか」、③「本研修を受けて、知識・技能の獲得や関心等の意識に変化はあったか」、④「あなたに最も影響を与えたものは何か（省察、対話、自主研修、講義からの選択）」、⑤「③と④の回答の理由」、⑥「改善の視点での意見」の回答について述べる。

設問①「自主研修の課題の設定や取組を進めるに当たり相談した人がいるか」について、6名が「いない」と回答した。「いる」とした場合、相手を記述の複数回答で求めた。最も多かった相手は同僚のべ12名（先輩教員、同じ校務分掌や同じ学年の教員、通常学級の担任など）、次に管理職のべ11名、次に同期の教員で4名であり、同じ職場の教職員と相談しながら実践していることが分かった。養護教諭は学校に一人であることが多く、他の学校にいる同期の養護教諭と相談していた。

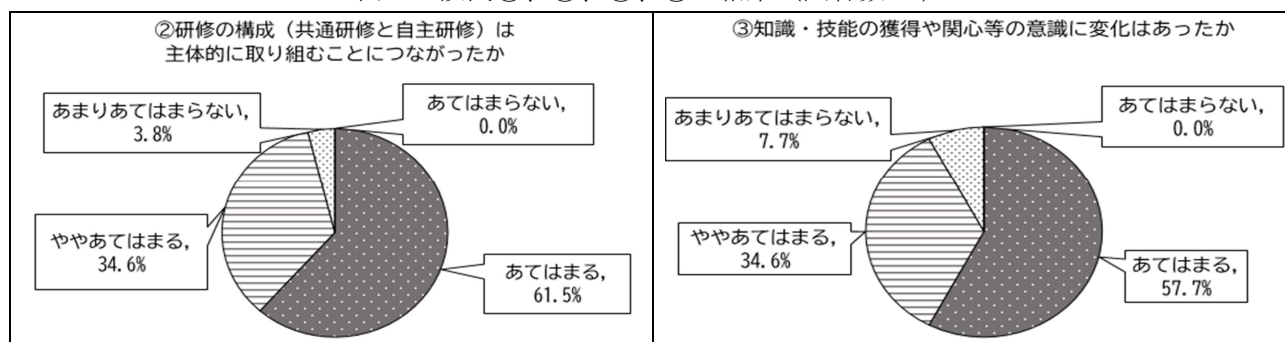
設問②、③、④、⑤の結果を表3に示す。設問⑤の回答は、ユーザーローカルAIテキストマイニングの結果で示す。

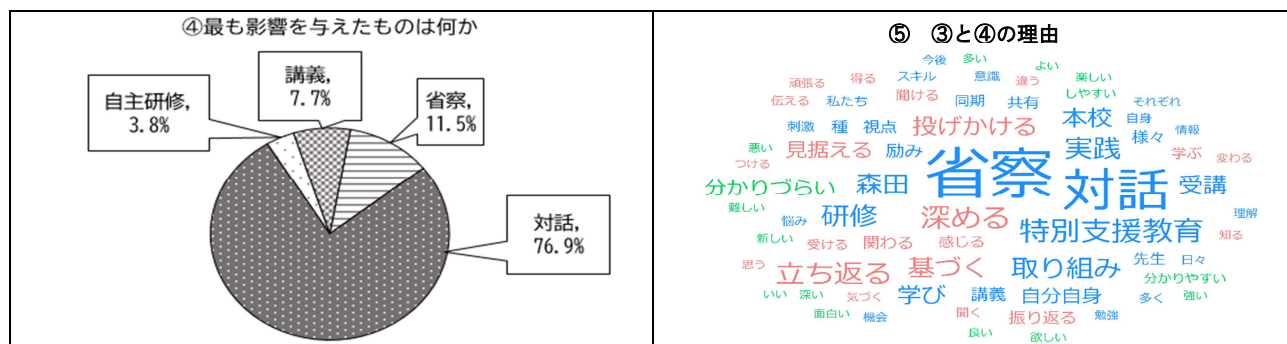
設問②研修の構成に関しては、1名が「あまりあてはまらない」と回答したが、多くの受講者の意識に影響を与えたことが分かる。設問③知識・技能の獲得、関心等の意識の変化についても、「あまりあてはまらない」と回答したのは2名であった。

設問④「省察、対話、自主研修、講義」のうち最も影響を与えたものに関する回答では、圧倒的に対話が多く20名（76.9%）、ついで省察が3名（11.5%）、講義2名（7.7%）、自主研修1名（3.8%）となった。設問③と④の理由の記述を見ても「対話」は大きく現れている。設問④で「対話」を選択した回答者の理由の記述内容を読み取ると「対話をすることで知識や価値観をより深めることができた」、「話を聞くだけでなく、自分のことを振り返ったり（後略）」、「自分のことを伝えることで、自分自身の考えも整理できた」のように、対話から視野の広がり、気づき、省察、客観視につながっている。「省察」は⑤の図の中央に大きく位置しており、重要性の実感がうかがえる。

設問⑥改善の視点での意見では、異校種で構成したグループで一年間対話したことについて好意的な意見、他の受講者との意見交換を望む意見、安心できる場と人という条件がそろうことで対話が成り立つことや校内研修等で省察・対話・探究型を取り入れたいなどの意見があった。

表3 設問②、③、④、⑤の結果（回答数26）





5 考察

ねらいとした省察、対話、探究は、アンケート調査の結果から関連性が認められた。受講者は対話を中心にして、省察、探究を結び付けていると考えられる。本研修での対話に対する受講者の認識には、思いや考えを言葉にすることの意義と児童生徒の探究的な学びの体験の二つの要素が認められる。思いや考えを言葉にすることの意義については、自分のことを伝えることと相手の話を聞くことの二つの役割があった。自分のことを伝えることは、伝えるために自分自身を省察することと強く結び付いていた。更に、同じ職場の教職員や児童生徒に対して言葉で伝えたいという意識につながっていた。相手の話を聞くことは、対話の中で相手を価値付けることの大切さの実感、さらに自分が価値付けられることの安心感につながっていた。そして、この実感がグループの中の受容の雰囲気を作り上げていた。児童生徒の探究的な学びの体験については、グループのメンバーが抱えている課題や実践について、解決策などを話し合う過程が探究的な学びの思考の過程と重なっていると実感していた。研修終了後に実施したヒアリング調査の中で、ファシリテーターがいることで受講者は司会者や記録者などという役割をする必要がなく話すこと聞くことに集中できたとある受講者が話していた。このことから、ファシリテーターがいる本研修の対話が、省察を踏まえて思いや考えを言葉にすることの意義と児童生徒の探究的な学びを体験することにつながったと捉えることができる。

加えて、本研修の省察、対話、探究には記録が欠かせないことも分かった。記録することが省察することにつながり、対話につながる。具体的には、記録することから課題や実践に取り組むために思考を整理したり、今後の見通しをもったりすることにつながっていた。

6 成果と課題

発展期教諭等研修の試行実施における成果は、省察、対話、探究とそれを支える記録である。中堅期以降から管理職になる前、採用20年目となる発展期の教員を対象にした本研修において、高めたい力とした省察、対話、探究とその支えとなる記録によって、受講者は教育実践を省察し、学校経営等の総括的・指導的な役割を果たそうとしていた。そして、研修受講の一年だけでなく、次年度以降もその意識をもって取り組もうと考えていた。

課題は、受講者がそれぞれの所属校で取り組む教育実践課題に対する教育センターの手立てである。受講者自身、また受講者の状況などにより各自が取り組む教育実践課題は様々である。受講者がその教育実践課題に取り組むために、研修ではグループ対話、講義による他者との交流の場を設定することができる。受講者が「新たな教師の学びの姿」を体現しながら、探究心をもって自律的に学ぶことができる研修とするために、受講者が考える課題やそのための取組を具体化したり焦点化したりして、実践につなげるための手立てを今後も検討する必要があると考える。

【引用文献】

文部科学省 (2020) : 中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会審議まとめ
 文部科学省 (2021) : 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して
 独立行政法人教職員支援機構 (2022) : NITS 戦略～新たな学びへ～